

眉かくしの霊

泉鏡花

青空文庫

木曾街道きそかいじょう、奈良井の駅は、中央線起点、飯田町いいたまちより一五八哩マイル

二、海拔三二〇〇尺、と言い出すより、膝栗毛ひざくりげを思う方が手つ

取り早く行旅の情を催させる。

ここは弥次郎兵衛やじろべえ、喜多八きだはちが、とぼとぼと鳥居峠とりいとうげを越すと、

日も西の山の端はに傾きければ、両側の旅籠屋はたごやより、女ども立ち出

でて、もしもお泊まりじやござんしないか、お風呂ふろも湧わいてい

ずに、お泊まりなお泊まりな——喜多八が、まだ少し早いけれど

……弥次郎、もう泊まってもよかろう、のう姐ねえさん——女、お泊

まりなさんし、お夜食はお飯まんまでも、蕎麦そばでも、お蕎麦でよかあ、おはたご安くして上げませず。弥次郎、いかさま、安い方がいい、蕎麦でいくらだ。女、はい、お蕎麦なら百十六銭もんでござんさあ。二人は旅銀の乏しさに、そんならそうときめて泊まって、湯から上がると、その約束の蕎麦が出る。さつそくにいくかかって、喜多八、こつちの方では蕎麦はいいが、したじが悪いにはあやまる。弥次郎、そのかわりにお給仕がうつくしいからいい、のう姐さんと洒落しやれかかって、もう一杯くんねえ。女、もうお蕎麦はそれぎりでござんさあ。弥次郎、なに、もうねえのか、たつた二せんずつ食つたものを、つまらねえ、これじゃあ食いたりねえ。喜多八、はたごが安いも凄すさまじい。二はいばかり食っていられるものか。

弥次郎……馬鹿なつらな、銭は出すから飯をくんねえ。……無慙むざん
 や、なけなしの懐ふところ中を、けつく蕎麦だけ余計につかわされて悄し
 気返よげる。その夜、故郷の江戸お笹笥町たすすまち引出し横町、取手屋とつてやの鑢か
 兵衛んべえとて、工面のいい馴染なじみに逢あつて、ふもとの山寺に詣もつでて鹿しかの
 鳴き声を聞いた処ところ……

……と思うと、ふとここで泊まりたくなつた。ステーションステーションを、も
 う汽車が出ようとする間際まぎわだつたと言うのである。

この、筆者の友、境さかい賛吉さんきちは、実はつた薦つたかずら木曾きその棧橋かけはし、
 寢覚ねざめの床とこなどを見物のつもりで、上松あげまつまでの切符を持っていた。
 霜月の半ばであつた。

「……しかも、その（蕎麦二膳ぜん）には不思議な縁がありましたよ

……」

と、境が話した。

昨夜は松本で一泊した。御存じの通り、この線の汽車は塩尻しおじりから分岐点のりかえで、東京から上松へ行くものが松本で泊まったのは妙である。もつとも、松本へ用があつて立ち寄つたのだと言えば、それまででぎつと済む。が、それだと、しめくりが緩ゆるんでちと辻褄つじつまが合わない。何も穿鑿せんさくをするのではないけれど、実は日数の少ないのに、汽車の遊びを貪むさぼつた旅行たびで、行途ゆきは上野から高崎、妙義山を見つつ、横川、熊くまの平、浅間を眺め、軽井沢、追分をすぎ、篠しのの井線いに乗り替えて、姨おば捨田すて毎ごとを窓のぞから覗いて、泊りはそこで松本が予定であつた。その松本には「いい娘の居る旅

館があります。懇意ですから御紹介をしましょう」と、名のきこえた画家が添え手紙をしてくれた。……よせばいいのに、昨夜その旅館につくと、なるほど、帳場にはそれらしい束髪の女が一人見えたが、座敷へ案内したのは無論女中で。……さてその紹介状を渡したけれども、娘なんぞ寄つても着かない、……ばかりでない。この霜夜に、出しがらの生なまぬる温い渋茶一杯汲くんだきりで、お夜食ともお飯まんまとも言い出さぬ。座敷は立派で卓したんは紫檀だ。火鉢ひばちは大きい。が火の気はほつちり。で、灰の白いのにしがみついて、何しろ暖かいものでお銚ちようし子をと云いうと、板前で火を引いてしまいました、なんにも出来ませんと、女ねえさん中の素そつけ気なさ。寒さは寒し、なるほど、火を引いたような、家中寂ひっそり寞とはしていたが、

まだ十一時前である……酒だけなりと、頼むと、おあいにく。酒はないのか、ござりません。——じゃ、麦酒ビールでも。それもお気の毒様だと言う。姐ねえさん……、境は少々居直つて、どこか近所から取り寄せてもらえまいか。へいもう遅うござりますで、飲食店は寝ましたでな……飲食店と言やあがる。はてな、停車場ステーションから、震えながら俾くるまでくる途中、ついこの近まわりに、冷たい音して、川が流れて、橋がかかつて、両側に遊ゆうかく廓らしい家が並んで、茶めしの赤い行燈あんどんもふわりと目の前にちらつくのに——ああ、こうと知つたら軽井沢で買った二合罫びんを、次郎どのの狗いぬではないが、皆なめてしまうのではなかったものを。大歎息おおためいきとともに空すき腹ばらをぐうと鳴らして可哀あわれな声で、姐さん、そうすると、酒もなし、

麦酒もなし、肴さかなもなし……お飯まんまは。いえさ、今晚の旅籠はたごの飯は。

へい、それが間に合いませんので……火を引いたあとなもんでな

あ——何の怨うらみか知らないが、こうなると冷遇を通り越して奇きつか

怪いである。なまじ紹介状があるだけに、喧嘩けんか面で、宿を替え

るとも言われぬ。前世ぜんせいの業ごうと断念あきらめて、せめて近所で、蕎麦そばか

饅頭うしんの御都合はなるまいか、と恐る恐る申し出ると、饅頭なら聞

いてみましょう。ああ、それを二ぜん頼みます。女中は遁にげ腰ごしの

もつたて尻じりで、敷居へ半分だけ突き込んでいた膝ひざを、ぬいと引つ

こ抜いて不精ふしように出て行く。

待つことしばらくして、盆で突き出したやつを見ると、井どんぶりがた

った一つ。腹すの空いた悲しさに、姐さん二ぜんと頼んだのだが。

と詰なるように言うと、へい、二ぜん分、装もり込んでございますで。
いや、相わかりました。どうぞおかまいなく、お引き取りを、と
言うまでもなし……ついと尻を見せて、すたすたと廊下を行くの
を、継ま児まのような目つきで見ながら、抱き込むばかりに蓋ふたを取
ると、なるほど、二ぜんもり込みだけに汁したじがぽちり、餛飩は白
く乾かいていた。

この旅館が、秋葉山あきばさん三尺坊が、飯い綱いづな権現へ、客を、たちも
のにしたところへ打撞ぶつかったのであろう、泣くより笑いだ。

その……餛飩二ぜんゆうべの昨夜を、むかし弥次郎、喜多八が、夕ゆうは
旅籠たごの蕎麦二ぜんくらに思い較べた。いささか仰山だが、不思議の
縁ゆかりというのはこれで——急に奈良井へ泊とまってみたくないので

ある。

日あしも木曾の山の端はに傾いた。宿しゆくには一時雨ひとしぐれさつとかかつた。

雨ぐらいの用意はしている。駅前駅前の俵たよは使たらないで、洋傘かさで寂しくしの凌いで、鴨居かめいの暗い檐のきづたいに、石ころ路みちを辿たどりながら、度胸すは据すえたぞ。——持もつて来い、蕎麦二膳ぜん。で、昨夜の饅頭やは暗みう討うちだ——今宵こよいの蕎麦は望むところだ。——旅のあわれを味わおうと、硝子張ガラスりの旅館一二軒を、わぎと避けて、軒やまかごに山駕籠ひと干菜ばを釣つるし、土間の竈かまどで、割木わりぎの火を焚たく、侘わびしそうな旅籠屋をからす鳥からすのように覗のぞき込み、黒くろき外套がいとうで、御免ごめんと、入ると、頬冠ほおかぶりりをした親父おやじがその竈かまの下を焚たいている。框かまちがだだ広く、炉ろが大きい。

く、すす煤けた天井に八間行燈の掛かつたのは、山駕籠と対ついの註ちゆうも文通り。階子下はしごしたの暗い帳場に、坊主頭の番頭は面白い。

「いらつせえ。」

蕎麦二膳、蕎麦二膳と、境が覚悟の目の前へ、身軽にひよいと出て、慇懃いんぎんに会釈えしやくをされたのは、焼麩やきぶだと思ふ（しつぽく）の加料かやくが蒲鉾かまぼこだったような気がした。

「お客様だよ——鶴つるの三番。」

女中も、服装みなりは木綿もめんだが、前垂まえだれがけのさつぱりした、年とし紀の少わかい色白なのが、窓、欄干を覗く、松の中を、攀よじ上るように三階へ案内した。——十畳敷。……柱も天井も丈夫造りで、床の間の誂あつらえにもいささかの厭味いやみがない、玄関つきとは似もつかない、

しつかりした屋台である。

敷蒲団しきぶとんの綿も暖かに、熊くまの皮の見事なのが敷いてあるは。は
 はあ、膝栗毛時代に、峠とうげじ路で売っていた、猿さるの腹ごもり、大蛇おろち
 の肝、獣の皮というのはこれだ、と滑稽おどけた殿様になつて件くだんの熊の
 皮に着座に及ぶと、すぐに台だいじゆう十能へ火を入れて女中ねえさんが上が
 つて来て、惜し気もなく銅あかの大火鉢おおひばちへ打ちまけたが、またおび
 ただしい。青い火さきが、堅炭かたを搦からんで、真赤まこに烘おこつて、窓しに沁
 み入る山やまおろし風かぜはさつと冴さえる。三階はばかにこの火の勢いきほいは、大地震
 のあとでは、ちと申すのも憚はばかりあるばかりである。

湯にも入つた。

さて膳ぜんだが、——蝶ちようあし脚あしの上を見ると、蕎麦そば扱あいにしたは気

恥ずかしい。わらさの照焼はとにかくとして、ふつと煙の立つ厚焼の玉子に、椀わんが真白な半ぺんの葛くずかけ。皿さらについたのは、このあたりで佳品かひんと聞く、鵜つぐみを、何と、頭かしらを猪口ちよくに、股またをふつくり、胸を開いて、五羽、ほとんど丸焼にして芳かんばしくつけてあつた。

「ありがたい、……実にありがたい。」

境は、その女中に馴なれない手つきの、それも嬉しい……酌しやくをしてもらいながら、熊に乗って、仙人せんじんの御馳走ごちそうになるように、慇んぎんに礼を言った。

「これは大した御馳走ですな。……実にありがたい……全く礼を言いたいなあ。」

心底しんそこのことである。はぐらかすとは様子にも見えないから、

若い女中もかけ引きなしに、

「旦那だんなさん、お気に入りました嬉しゅうございますわ。さあ、もうお一つ。」

「頂ちようだい戴だいしよう。なお重ねて頂戴しよう。——時に姐ねえさん、この上うへのお願いだがね、……どうだろう、この鶉つぐみを別べつに貰もらって、こへ鍋なべに掛けて、煮ながら食たべるといふわけには行くまいか。——鶉つぐみはまだいくらもあるかい。」

「ええ、筴ざるに三杯さんぱいもございます。まだ台所の柱はしらにも束たばにしてかかっております。」

「そいつは豪ごうきぎ気だ。——少し余分に貰もらいたい、ここで煮にえるように……いいかい。」

「はい、そう申します。」

「ついでにお銚子ちようしを。火がいいから傍そばへ置くだけでも冷めはしない。……通いが遠くって気の毒だ。三本ばかり一時いちどきに持つておいで。……どうだい。岩見重太郎が註文ちゆうもんをするようだろう。」

「おほほ。」

今朝、松本で、顔を洗った水みず瓶がめの水とともに、胸が氷こおりに鎖とぎされたから、何の考えもつかなかった。ここで暖かに心が解けると、……分かった、饅頭うどんで虐待した理由わけというのが——紹介状をつけ
た画伯えびは、近頃でこそ一家をなしたが、若くて放浪した時代に信し
州路しゅうじを経歴へめぐって、その旅館には五月いつつきあまりも閉じ籠こもった。

とどこおなたごだい
 滞る旅籠代の催促もせず、帰途には草鞋錢まで心着けた深切な家うちだと言った。が、ああ、それだ。……おなじ人の紹介だから

旅籠代を滞らして、草鞋錢を貰うのだと思つたに違いない。……

「ええ、これは、お客様、お麓末そまつなこととして。」

と紺の鯉こいづち口に、おなじ幅広の前掛けた、瘦やせた、色のやや

青黒い、陰気だが律儀りちぎらしい、まだ三十六七ぐらいな、五分刈り

の男が丁寧に襖ふすまぎわ際かしこに畏かしこまった。

「どういたして、……まことに御馳走様。……番頭さんですか。」

「いえ、当家の料理人にございます、至ふつつかつて不束でございま

して。……それに、かような山家やまが辺鄙へんびで、一向お口に合いますも

のもございませんで。」

「とんでもないこと。」

「つきまして、……ただいま、女どもまでおつしやりつけでございましたが、あなたさま 鵜を、いなか 貴方様、何か鍋でめしあがりたいたいというおことば
言で、いかようにいたして差し上げましょうやら、右、女どもも
やっぱり田舎もののございませうで、よくお言がのみ込めか
ねます。ゆえに失礼ではございますが、ちよいとお伺いに出ま
してございますが。」

境は少なからず面くらった。

「そいつはどうも恐縮です。——遠方のところを。」

とうつかり言った。……

「串じょうだん 戲のようですが、全く三階まで。」

「どう仕りまして。」

「まあ、こちらへ——お忙しいんですか。」

「いえ、お膳は、もう差し上げました。それが、お客様も、貴方様のほか、お二組ぐらいよりございません。」

「では、まあこちらへ。——さあ、ずっと。」

「はッ、どうも。」

「失礼をするかも知れないが、まあ、一杯。ああ、——ちようどお銚子が来た。女中さん、お酌をしてあげて下さい。」

「は、いえ、手前不調法で。」

「まあまあ一杯。——弱ったな、どうも、鶉を鍋でと言つて、：

…その何ですよ。」

「旦那様、帳場でも、あの、そう申しておりますの。鵜は焼いてめしあがるのが一番おいしいんでございますつて。」

「お膳にもつけて差し上げましたが、これを頭から、その脳味噌のうみそをするりとな、ひと嚙かじりにめしあがりますのが、おいしいんでございまして、ええとんだ田舎流儀ではございますがな。」

「お料理番さん……私は決して、料理をとやこう言うたのではないのですよ。……弱つたな、どうも。実はね、あるその宴会の席で、その席に居た芸妓げいしやが、木曾の鵜の話をしたんです——大分酒が乱れて来て、何とか節ふしというのが、あつちこつちではじまると、木曾節きそくというのがこの時あ頭らわれて、——きいても可懐なつかしい土地だから、うろ覚えうろ覚えに覚えているが、（木曾へ木曾へと積み出す

米は）何とかつていうのでね……」

「さようで。」

と真四角に猪口ちよくをおくと、二つ提げさの煙草たばこ入れから、吸いかけた煙管きせるを、金かねの火鉢ひばちだ、遠慮なくコツツンと敲たたいて、

「……（伊那いなや高遠たかとの余り米）……と言うでございませす、米、この女中の名でございませす、お米よね。」

「あら、何だよ、伊作いさくさん。」

と女中が横にらみに笑つて睨にらんで、

「旦那さん、——この人は、家うちが伊那だもんでございませすから。」

「はあ、勝頼かつより様と同国ですな。」

「まあ、勝頼様は、こんな男ぶりじやありませんが。」

「当り前よ。」

とむツつりした料理番は、苦笑いもせず、またコツツンと煙管を払く。

「それだもんですから、伊那の鼻屑ひいきをしますの——木曾で唄うたうのは違いますが。——（伊那や高遠へ積み出す米は、みんな木曾路きそじの余り米）——と言いますの。」

「さあ……それはどつちにしろ……その木曾へ、木曾へのきつかけに出た話なんですから、私たちも酔つてはいるし、それがあとの贅にえがわ川がわだか、峠を越した先の藪原やぶはら、福島、上松あげまつのあたりだか、よくは訊きかなかつたけれども、その芸妓げいしやが、客と一所に、鵜あみを掛けに木曾へ行つたという話をしたんです。……まだ夜よ

の暗いうちに山道をずんずん上つて、案内者の指揮さしずの場所で、かすみを張つておとり囿を揚げると、夜明け前、霧のしらじらに、向うの尾上おのえを、ぱつとこちらの山の端はへ渡る鶉の群れが、むらむらと来て、羽ばたきをして、かすみに掛かる。じわじわととつて占めて、すぐに焚火たきびで付け焼きにして、膏あぶらの熱いところを、ちゅツと吸つて食べるんだが、そのおいしいこと、……と言つて、話をしてね……」

「はあ、まったくて。」

「……ぶるぶる寒いから、煮爛にえかんで、一杯のみながら、息もつかずに、幾口か鶉かじを噛つて、ああ、おいしいと一息して、焚火にしがみついたのが、すつと立つと、案内についた土地の猟師が二人、

きやツと言つた——その何なんですよ、芸妓の口が血だらけになつていたんだとき。生なまなま々とした半熟の小鳥の血です。……この話をしながら、うつかりしたようにその芸妓は手ハンケチ巾で口をおさ圧えたんですがね……たらたらと赤いやつが沁しみそうで、私は顔を見ましたよ。触さわると撓しないそうな瘦やせぎすな、すらりとした、若い女で。……聞いてもうまそうだが、これは凄すげかつたろう、その時、東京で想像しても、嶮けわしいとも、高いとも、深いとも、峰谷の重なり合つた木曾山中のしらしらあけです……暗い裾すそに焚火を搦からめて、すつくりと立ち上がったという、自然、目の下の峰よりも高い処ところで、霧の中から綺麗きれいな首が。」

「いや、旦那だんなさん。」

「話は拙ますくつても、何となく不気味だね。その口が血だらけなんだ。」

「いや、いかにも。」

「ああ、よく無事だったな、と私が言うのと、どうして？ と訊くから、そういうのが、慌あわてる銃猟家だの、魔のさした猟師に、峰越しの笹原ささはらから狙ねらい撃ちうちに二つ弾丸だまを食らうんです。……場所と言いい……時刻と言いい……昔から、夜待ち、あけ方の鳥あみには、魔がさして、怪しいことがあると言うが、まったくそれは魔がさしたんだ。だって、靦てきめん面に綺麗な鬼になったじゃあないか。……どうせそうよ、……私は鬼よ。——でも人に食われる方の……なぞと言いいながら、でも可こ恐わいわね、ぞつとする。と、また口を

手巾で圧えていたのさ。」

「ふーん。」と料理番は、我を忘れて沈んだ声して、

「ええ。旦那、へい、どうも、いや、全く。——實際、危のうご

ざいますな。——そういう場合には、きつと怪我があるんでして

……よく、その姐さんは御無事でした。この贄川の川上、御嶽

口。美濃寄りの峽は、よけいに取れますが、その方の場所はど

こでございますか存じません——芸妓衆は東京のどちらの方

で。」

「なに、下町の方ですがね。」

「柳橋……」

と言つて、覗くように、じつと見た。

「……あるいはその新橋とか申します……」

「いや、その真中ほどです……日本橋の方だけれど、宴会の席ばかりでの話ですよ。」

「お処が分かつて差支さしつかえがございませんければ、参考のために、その場所を伺っておきたいくらいでございまして。……この、深

山幽谷のことは、人間の智慧ちえには及びません——」

女中も俯向うつむいて暗い顔した。

境は、この場合誰だれもしよう、乗り出しながら、

「何か、この辺に変わったことでも。」

「……別にその、と云ってございません。しかし、流れに瀬がございませうように、山にも淵ふちがございませうで、気をつけなければな

りません。——ただいまさしあげましたつぐみ鶉は、これは、つい一兩日続きました、珍しく上の峠とうげち口で猟があつたのでございます。

「さあ、それなんですよ。」

境はあらためて猪口ちよくをうけつつ、

「料理番さん。きみのお手際てぎわで膳ぜんにつけておくんなすつたのが、

見てもうまそうに、香かんばしく、脂あぶらの垂れそうなので、ふと思ひ出し

たのは、今の芸妓げいしやの口が血の一件でね。しかし私は坊さんでも、

精進でも、何でもありません。望んでも結構なんだけれど、見た

まえ。——窓の外は雨と、もみじで、霧が山を織っている。峰の

中には、雪を頂いて、雲を貫いて聳そびえたのが見えるんです。——

どんな拍子かで、ひよいと立ちでもした時口が血になつて首が上へ出ると……野郎でこの面つらだから、その芸妓すこのような、凄く美しく、山の神の化身けしんのようには見えまいがね。落ち残つた柿かきだと思つて、窓の外から鳥からすが突つかないとも限らない、……ふと変な気がしたものだから。」

「お米さん——電燈でんきがなぜか、遅いでないか。」
料理番が沈んだ声で言った。

時雨しぐれは晴れつつ、木曾の山々に暮が迫つた。奈良井川ならいがわの瀬が響く。

「何だい、どうしたんです。」

「ああ、旦那。」と暗夜の庭の雪の中で。

「鷺が来て、魚を狙うんでございます。」

すぐ窓の外、間近だが、池の水を渡るような料理番——その伊作の声がする。

「人間が落ちたか、獺でも駈け廻るのかと思つた、えらい音で驚いたよ。」

これは、その翌日の晩、おなじ旅店の、下座敷でのことであつた。……

境は奈良井宿にとうりゆう逗留した。ここに積もつた雪が、朝から降

り出したためではない。別にこのあたりを見物するためでもなかつた。……昨夜は、あれから——なべ鵜を鍋でとあつち誂えたのは、しやも、かしわをするように、ぜん膳のわきでひぼち火鉢へ掛けて煮るだけのこと、と言つたのを、料理番が心得て、そのぶつ切りを、皿に山もり。目め筈ざるに一杯、ねぎ葱のざくざくを添えて、しょうゆ醬油も砂糖も、むきだしにかつ担かぎあげた。お米が烈々と炭をこし継ぐ。

越こしの方だが、境の故郷いまわりでは、季節になると、この鵜を珍重すること一通りでない。料理屋がおんりょうり鵜御料理、じぶ、おこのみなどという立看板を軒に掲げる。鵜うどん、そば鵜蕎麦と蕎麦屋までがびら貼紙を張る。ただしやす安価くない。何のわん椀、どのはち鉢に使つても、

おん羹あつもの、おん小蓋こぶたの見識こぶたで。ぽつちり三鬘みきれ、五鬘いっきれよりは附けな
いのひとつに、葱ひとつと一所ひとつに打ち覆ぶけて、鍋まからもりこぼれるような湯気
を、天井へ立てたは嬉うれしい。

あまつさえ熱爛あつかんで、熊くまの皮くまに胡坐あぐらで居た。

芸妓げいしやの化けげいしやものが、山賊やまぞくにかわつたのである。

寝る時には、厚あつ衾ふすまに、この熊くまの皮くまが上へ被かぶさつて、袖そでを包

み、蔽おほい、裙すそを包すそんだのも面白い。あくる日、雪ゆきになろうとてか、

夜よ嵐あらしの、じんよと身みに浸しむのも、木曾川きぞがわの瀬せの凄すごいのも、もの

数かずともせず、酒さけの血ちと、獣けものの皮かわとで、ほかほかして三階さんがいにぐつす

り寝ね込んだ。

次第しだいであるから、朝あさは朝飯あさめしから、ふつふつと吹ふいて啜すするような

豆腐しるの汁も氣に入った。

一昨日いつさくじつの旅館の朝はどうだろう。……溝どぶの上澄みのような冷たい汁に、おん羹ほどに蜷しじみが泳いで、生煮えの臭さといったらなかつた。……

山も、空も氷を透とおすごとく澄みきつて、松の葉、枯木の閃きらめくばかり、晃きらきら々と陽ひがさしつ、それで、ちらちらと白いものが飛んで、奥山に、熊が人立じんりつして、針を噴ふくような雪であつた。

朝飯あさが済んでしばらくすると、境はしくしくと腹いたが疼みだした。——しばらくして、二三度はばかりへ通つた。

あの、餛飩うどんの祟たたりである。鵜を過食したためでは断じてない。二ぜん分を籠こみにした生がえりのうどん粉あの中毒あたらない法はない。

お腹なかをおさべて、饅頭を思うと、思う下からチクチクと筋が動いて痛み出す。——もつとも、戸外そとは日当りに針が飛んでいようが、少々腹が痛もうが、我慢して、汽車に乗れないという容体ようたいではなかったの。……ただ、誰も知らない。この宿の居心のいいのにつけて、どこかへのつらあてにと、逗とまり留ゆるする気になつたのである。

ところで座敷だが——その二度めだったか、廁かわやのかえりに、わが座敷へ入ろうとして、三階の欄干てすりから、ふと二階を覗くと、階は子段しごだんの下に、開けた障子に、箒ほうきとはたきを立て掛けた、中の小座敷に炬燵こたつがあつて、床の間が見通される。……床こうつりに行きと二つばかり重ねた、あせた萌葱もえぎの風呂敷ふろしきづつみの、真田紐さなだひもで中結わ

えをしたのがあつて、旅商人たびあきんどと見える中年の男が、ずツぷり床を背負しよつて当たっていると、向い合いに、一人の、中年増ちゆうどしまの女中がちよいと浮腰ひざで、膝ひざをついて、手さきだけ炬燵かまどに入れて、少し仰向おほむかくようにして、旅商人と話をしている。

なつかしい浮世うきよの状さまを、山の崖がけから掘り出して、旅宿やどに嵌はめたように見えた。

座敷は熊の皮である。境は、ふと奥山おくやまへ棄すてられたように、里心が着いた。

一昨日おととい松本で城を見て、天守に上つて、その五層いつつめの朝霜の高層たかねに立つて、ぞつとしたような、雲に連なる、山々のひしと再び窓に来て、身に迫るのを覚えもした。バスケットに、等閑なわざりに絡から

めたままの、城あとの崩れ堀の苔むす石垣を這つて枯れ残つた
つたくれない、つぐみの紅の、鶉の血のしたたるごときを見るにつけても。

……急に寂しい。——「お米さん、下階に座敷はあるまいか。——
 —炬燵に入つてぐつすりと寝たいんだ。」

二階の部屋々々は、時ならず商人衆の出入りがあるからと、
 望むところの下座敷、おも屋から、土間を長々と板を渡つて離れ
 座敷のような十畳へ導かれたのであつた。

ひしかけまど
 脇掛窓の外が、すぐ庭で、池がある。

白雪の飛ぶ中に、緋鯉の背、真鯉の鰭の紫は美しい。梅も松も
 あしらつたが、大方は檜榎の大木である。朴の樹の二抱えばかり
 なりのさえずつくと立つ。が、いずれも葉を振るつて、素裸

の山神さんじんのごとき装いだつたことは言うまでもない。

午後三時ごろであつたらう。枝こずえに梢おんなに、雪の咲くのを、炬燵で斜はすか違ちがいに、くの字なになつて——いい婦おんなだとお目に掛かけたい。

肱掛窓のぞを覗くと、池の向うの椿つばきの下に料理番が立つて、つくねんと腕組しりして、じつと水を瞻みまもるのが見えた。例の紺つの筒袖つツッぽに、尻しりからすぽんと巻いた前まえ垂だれで、雪の凌しのぎに鳥打帽かぶを被かつたのは、いやしくも料理番が水中の鯉どじょうを覗ねらくとは見えない。大きな鵜ぼんが沼の鰯どじょうを狙ねらつてゐる形である。山も峰も、雲深くその空を取り囲む。境は山間の旅情を解した。「料理番さん、晩ごちそうの御馳走ごちそうに、その鯉を切るのかね。」「へへ。」と薄暗い顔を上げてニヤリと笑いながら、鳥打帽を取つてお時儀をして、また被り直すと、そのま

まごそごそと樹を潜つて廂に隠れる。

帳場は遠し、あとは雪がやや繁くなつた。

同時に、さらさらさらさらと水の音が響いて聞こえる。「――

また誰か洗面所の口金を開け放したな。」これがまた二度めで。

……今朝三階の座敷を、ここへ取り替えない前に、ちと遠いが、

手水を取るのに清潔だからと女中が案内をするから、この離座

敷に近い洗面所に来ると、三カ所、水道口があるのにそのどれを

捻つても水が出ない。さほどの寒さとは思えないが凍てたのかと

思つて、咄のように高く手を鳴らして女中に言うと、「あれ、汲

み込みます。」と駈け出して行くと、やがて、スツと水が出た。

――座敷を取り替えたあとで、はばかりに行くと、ほかに手水

鉢ばちがないから、洗面所の一つを捻ひねったが、その時はほんのたらたらと滴したたつて、辛かろうじて用が足りた。

しばらくすると、しきりに洗面所の方で水音がする。炬燵こたつから潜もくり出て、土間へ下りて橋がかりからそこを覗のぞくと、三ツの水道みず口ぐち、残みすらず三条の水が一齊いちどきにぎつと灌そそいで、徒いたずらに流れていた。たしない水らしいのに、と一つ一つ、丁寧にしめて座敷へ戻った。が、その時も料理番が池のへりの、同じ処ところにつくねんと彳たたずんでいたのである。くどいようだが、料理番の池に立ったのは、これで二度めだ。……朝のは十時ごろであつたらう。トその時料理番が引つ込むと、やがて洗面所の水が、再び高く響いた。

またしても三条の水道が、残らず開け放しに流れている。おな

じこと、たしない水である。あとで手を洗おうとする時は、きつと涸かれるのだからと、またしても口金をしめておいたが。――

いま、午後の三時ごろ、この時も、さらにその水の音が聞こえ出したのである。庭の外には小川も流れる。奈良井川の瀬も響く。木曾へ来て、水の音を気にするのは、船に乗って波を見まいとすようなものである。望みこそすれ、嫌きらいも避けもしないのだけれど、不思議に洗面所の開け放しばかり気になった。

境はまた廊下へ出た。果して、三条とも揃そろつて――しよろしよろと流れている。「旦那だんなさん、お風呂ふろですか。」手拭てぬぐいを持っていたのを見て、ここへ火を直しに、台十じゅうのう能のうを持って来かかった、お米が声を掛けた。「いや――しかし、もう入れるかい。」

「じきでございます。……今日はこの新館のが湧きますから。」なるほど、雪の降りしきるなかに、ほんのりと湯の香が通う。洗面所の傍わきの西洋扉せいようどが湯殿らしい。この窓からも見える。新しく建て増した柱立てのまま、筵むしろがこいにしたのもあり、足場を組んだ処ところがあり、材木を積んだ納屋なやもある。が、荒れた厩うまやのようになって、落葉に埋うもれた、一帯、脇本陣わきほんじんとでも言いそうな旧家が、いつか世が成金とか言った時代の景気につれて、桑くわも蚕かいこも当たつたであろう、このあたりも火の燃えるような勢いに乗じて、贅にえが川わはその昔は、煮え川にして、温泉いでゆの湧いた処だなぞと、ここが温泉にでもなりそうな意気込みで、新館建増しにかかったのを、この一座敷と、湯殿ばかりで、そのまま沙汰さたやみになったことな

ど、あとで分わかつた。「女中ねえさんかい、その水を流すのは。」閉めたばかりの水道の栓せんを、女中が立ちながら一つずつ開けるのを視みて、たまらず詰なじるように言いつたが、ついでにこの仔細しさいも分わかつた。……池は、樹きの根ねに樋といを伏ふせて裏うらの川がわから引ひくのだが、一年に一二度いちにどずつ水みづ涸がれがあつて、池の水が干ひようとする。鯉こいも鮒ふなも、
 一ひととところ 処ところへ固かたまつて、泡あわを立てて弱よわるので、台所だいしよの大おお桶おけへ汲くみ込こんだ井戸いどの水みづを、はるばるとこの洗面所せんめんしよへ送おくつて、橋はしがかりの下したを潜くぐらして、池へ流ながし込こむのださうであつた。

木曾道中の新版まきぞうを二三種しゆばかり、枕まくらもとに散まらした炬燵炬燵へ、ずぶずぶと潜もぐつて、「お米こめさん、……折まり入いつて、お前まへさんに頼たのみがある。」と言いいかけて、初う々うしくちよつと俯うつむ向むくのを見みると、

猛然として、喜多八を思い起こして、わが境は一人で笑った。

「ははは、心配なことではないよ。——おかげで腹あんばいも至つてよくなつたし、……午飯ひるを抜いたから、晩には入り合せにかつ食い、大いに飲むとするんだが、いまね、伊作さんが渋苦い顔をして池を睨にらんで行きました。どうも、鯉こいのふとり工合ぐあいを鑑定めききしたものらしい……きつと今晚ごちそうの御馳走ごちそうだと思ふんだ。——昨夜ゆうべの鵜つぐみじやないけれど、どうも縁あつて池の前に越して来て、鯉こいと隣まないた付き合あひになつてみると、目の前から引き上げられて、俎なまで輪切まなりは酷ひどい。……板前の都合もあろうし、またわがまを言うのではない。……

活いきづくりはお断わりだが、実は鯉こい汁じゆ大歓迎なんだ。しかし、

魚屋か、何か、都合して、ほかの鯉を使つてもらうわけには行くまいか。——差し出たことだが、一尾か二尾びきで足りるものなら、お客は幾人だか、今夜のいりよう入用だけは私ひきがその原料を買つてもいいから。」女中の返事が、「いえ、この池のは、いつもお料理にはつかいませんのでございます。うちの旦那も、おかみさんも、お志の仏の日には、鮎だの、鯉だの、……この池へ放しなさんでございます。料理番さんもやつぱり。……そして料理番あのひとは、この池のを大事にして、可愛かわいがつて、そのせいですか、隙ひまさえあれば、黙つてああやつて庭へ出て、池を覗いていますんです。」

「それはお誂あつらえだ。ありがたい。」境は礼を言つたくらいであつた。

雪の頂から星が一つ下がったように、入相いりあいの座敷に電燈の点いた時、女中が風呂を知らせに来た。

「すぐに膳ぜんを。」と声を掛けておいて、待ち構えた湯どのへ、一散——例の洗面所の向うの扉とを開けると、上がり場らしいが、ハテ真暗である。いやいや、提ちようちん灯が一燈ぼうと薄白く点いている。そこにもう一枚扉ひらきがあつて閉まつていた。その裡なかが湯どのらしい。

「半作事はんさくじだと言うから、まだ電燈でんきが点かないのだろう。おお、ふたどもえ二つ巴の紋だな。大星だか由良之助ゆらのすけだかで、鼻つを衝く、鬱陶うつとうしい巴の紋も、ここへ来ると、木曾殿の寵ちようあい愛を思い出させるから奥床しい。」

と帯を解きかけると、ちやぶり——という——人が居て湯を使う気勢けはいがする。この時、洗面所の水の音がハタとやんだ。

境はためらった。

が、いつでもかまわぬ。……他ひとが済んで、湯のあいた時を知らせてもらいたいと言っておいたのである。誰も入ってはいまい。とにかくと、解きかけた帯を挟はさんで、ズツと寄つて、その提灯の上から、扉とにひつたりと頬ほおをつけて伺うと、袖そでのあたりに、すうーと暗くなる、蠟燭ろうそくが、またぼうと明あかくなる。影が痣あざになつて、巴かたほが一つ片頬かたほに映るように陰気に沁しみ込む、と思うと、ばちやり……内端うちわに湯が動いた。何の隙間すきまからか、ぷんと梅の香を、ぬくもりで溶かしたような白粉おしろいの香がする。

「おんな
婦人だ」

何しろ、この明りでは、男客にしろ、一所に入ると、暗くて肩も手も跨またぎかねまい。乳に打ぶつかりかねまい。で、ばたばたと草履ぞうりを突うつ掛けたまま引き返した。

「もう、お上がりになりました？」と言う。

通いが遠い。ここで爛かんをするつもりで、お米がさきへ銚ちようし子だ
け持つて来ていたのである。

「いや、あとにする。」

「まあ、そんなにお腹なかがすいたんですの。」

「腹もすいたが、誰かお客が入っているから。」

「へい、……こつちの湯どのは、久しく使わなかつたのですが、

あの、そう言つては悪うございますけど、しばらくぶりで、お掃そ除うじかたがた旦だんなさま那樣さまに立てましたのでございますから、……あとで頂きますまでも、……あの、まだどなたも。」

「かまやしない。私はゆつくりでいいんだが、婦人の客のようだったぜ。」

「へい。」

と、おかしなベソをかけた顔を見ると、手に持つ銚子が湯沸しにカチカチカチと震えたつけ、あとじさりじさりに、ふいと立って、廊下に出た。一度ひっそりあしおと蹠あしおと音を消すや否や、けたたましい音を、すたんと立てて、土間の板をはたはたと鳴らして駈かけ出した。

境はきよとんととして、

「何だい、あれは……」

やがて膳ぜんを持ってあら顕われたのが……お米でない、年増としまのに替わつていた。

「やあ、中二階のおかみさん。」

行商人と、炬燵こたつで睦むつまじかったのはこれである。

「御亭主ごていしゅはどうしたい。」

「知りませんよ。」

「ぜひ、承りたいんだがね。」

半ば串じょうだん戯だんに、ぐツと声を低くして、

「出るのかい……何か……あの、湯殿へ……まったく？」

「それがね、旦那、大笑いなのでございますよ。……どなたもい

らっしやらないと思つて、申し上げましたのに、御婦人の方が入つておいでだつて、旦那がおつしやつたと言うので、米ちゃん、大變な臆病おくびようなんですから。……久しくつかいません湯殿ですから、内のお上さんが、念のために、——」

「ああそうか、……私はまた、ちよつと出るのかと思つたよ。」

「大丈夫、湯どのへは出ませんけれど、そのかわりお座敷へはこんなのが、ね、貴方あなた。」

「いや、結構。」

お酌しやくはこの方が、けつく飲める。

夜は長い、雪はしんしんと降り出した。床を取つてから、酒をもう一度、その勢いでぐつつすり寝よう。晩飯ばんはいい加減で膳を下

げた。

登音が入り乱れる。ばたばたと廊下へ続くと、洗面所の方へ落ち合つたらしい。ちよろちよると水の音がまた響き出した。男の声も交じつて聞こえる。それが止むと、お米が襖ふすまから円まるい顔を出して、

「どうぞ、お風呂へ。」

「大丈夫か。」

「ほほほほ。」

とちとてれたように笑うと、身を廊下へ引くのに、押し続いて境は手てぬぐい拭きを提さげて出た。

橋がかりの下り口に、昨夜帳場に居た坊主頭の番頭と、女中頭がしら

か、それとも女房かと思う老けた婦おんなと、もう一人の女中とが、と
 いった形に顔を並べて、ひとかたまり一団ひとかたまりになつてこなたを見た。そこへ
 お米の姿が、足袋たびまで見えてちよこちよこと橋がかりを越えて渡
 ると、三人の懐ふところへ飛び込むように一団ひとかたまり。

「御苦労様。」

わがために、見とどけ役のこの人数で、風呂をしら検べたのだと思
 うから声を掛けると、一度に揃そろつてお時儀をして、屋根が萱かやぶき
 の長土間に敷いた、そのあゆみ板を渡つて行く。土間のなかばで、
 そのおじやのかたまりのような四人の形が暗くなつたのは、トタ
 ンに、一つ二つ電燈がスツと息を引くように赤くなつて、橋がか
 りのも洗面所いっせいのも一齊いっせいにパツと消えたのである。

と胸を吐くと、さらさらさらさらと三筋に……こう順に流れて、洗面所を打つ水の下に、さっきの提灯ちようちんが朦朧もうろうと、半ば暗く、巴ともえを一つ照らして、墨でかいた炎か、鯰なますの跳ねたか、と思う形ともに点ともれていた。

いまにも電燈が点つくだろう。湯殿口へ、これを持って入る気で、境がごみざまに手を掛けようとする、提灯がフツと消えて見えなくなつた。

消えたのではない。やっぱりこれが以前のごとく、湯殿の戸口に点ついていた。これはおのずから雫しずくして、下の板敷の濡ぬれたのに、目の加減で、向うから影が映さじたものである。はじめから、提灯がここにあつた次第わけではない。境は、斜めに影の宿つた水中の

月を手に取りろうとしたと同じである。

爪さぐりに、例の上がり場へ……で、念のために戸口に寄ると、息が絶えそうに寂^{ひっそり}寞しながら、ばちやんと音がした。ぞつと寒い。湯気が天井から雫^{しず}になつて点滴^{したた}るのではなしに、屋根の雪が溶けて落ちるような氣勢^{けはい}である。

ばちやん、……ちやぶりと微^{かす}かに湯が動く。とまた得^{えん}ならず艶^{えん}な、しかし冷たい、そして、におやかな、霧に白粉^{おしろい}を包んだよ
うな、人^{ひと}膚^{はだ}の気がすつと肩に絡^{まっ}わつて、頸^{うなじ}を撫^なでた。

脱^えぐはずの衣紋^{えもん}をかつしめて、

「お米さんか。」

「いいえ。」

と一呼吸間ひといきまを置いて、湯どこの裡なかから聞こえたのは、もちろんわが心がわが耳に響いたのである。——お米でないのは言うまでもなかったのである。

洗面所の水の音がびったりやんだ。

思わず立ち竦すくんで四辺あたりを見た。思い切つて、

「入りますよ、御免。」

「いけません。」

と澄みつつ、湯気に濡ぬれ濡ぬれとした声が、はっきり聞こえた。

「勝手にしろ！」

我を忘れて言った時は、もう座敷へ引き返していた。

電燈は明るかった。巴の提灯はこの光に消された。が、水は三筋、さらにさらさらと走っていた。

「馬鹿にしやがる。」

不気味より、凄^{すご}いより、なぶられたような、反感が起こつて、炬燵^{こたつ}へ仰向けにひっくり返った。

しばらくして、境が、飛び上がるように起き直ったのは、すぐ窓の外に、ざぶり、ばちやばちやばちや、ばちや、ちやツと、けたたましく池の水の掻き攪^かさる^{みだ}る音を聞いたからであつた。

「何だろう。」

ばちやばちやばちや、ちやツ。

そこへ、ごそごそと池を廻つて響いて来た。人の来るのは、なぜか料理番だろうと思つたのは、この池の魚うおを愛惜すると、聞いて知つたためである。……

「何だい、どうしたんです。」

雨戸を開けて、一面の雪の色のやや薄い処ところに声を掛けた。その池も白いまで水は少ないのであつた。

三

「どつちです、白鷺しらさぎかね、五位鷺ごいさぎかね。」

「ええ——どつちもでございますな。両方だろうと思つんでござい

「いますか。」

料理番の伊作は来て、窓下の戸際とぎわに、がツしり腕組をして、うしろ向きに立って言った。

「むこうの山口の大林から下りて来るんでございます。」
ことば 言の中にもあら頭あられる、雪の降りやんだ、その雲の一方は漆うるしのごとく森が黒い。

「不断のことではありませんが、……この、旦那だんな、池の水の涸かれるところを狙ねらうんでございます。鯉こいも鮒ふなも半分鱭ひれを出して、あがきがつかないのでございますから。」

「伶俐りこうな奴やつだね。」

「馬鹿な人間は困うつちまいます——魚うおが可哀かわい相そうでございませぬの

で……そうかと言つて、夜一夜、立番をしてもおられません。旦那、お寒うございます。おしめなさいまし。……そちこち御註文もんの時刻でございませうから、何か、不手際ふてぎわなものでも見繕つて差し上げます。」

「都合がいたら、君が来て一杯、ゆつくりつき合つてくれないか。——私は夜ふかしは平気だから。一所に……ここで飲んでいたら、いくらか案山子かかしになるだろう。……」

「——結構でございませう。……もう台所は片附きました、追ツツけ伺います。——いたずらな餓鬼どもめ。」

と、あとを口こごとで、空を睨にらみながら、枝をざらざらと潜くぐつて行く。

境は、しかし、あとの窓を閉めなかつた。もちろん、ごく細目には引いたが。——実は、雪の池のここへ来て幾羽の鷺の、魚を狩る状を、さながら、炬燵で見えるお伽話の絵のように思つたのである。すわと言え、追い立つるとも、驚かすとも、その場合のこととして……第一、気もそぞろなことは、二度まで湯殿の湯の音は、いずれの隙間からか雪とともに、鷺が起ち込んで浴みしたろう、とそうさえ思つたほどであつた。

そのままじつと覗いてみると、薄黒く、ごそごそと雪を踏んで行く、伊作の袖の傍を、ふわりと巴の提灯が点いて行く。おお今、窓下では提灯を持つてはいなかつたようだ。——それに、もうやがて、庭を横ぎつて、濡縁か、戸口に入りそうだ、と思うまで

距へだたった。遠いまで小さく見える、としばらくして、ふとあとへ戻るような、やや小さくなって、あの土間廊下の外の、萱かや屋根のつま下をすれずれに、だんだんこなたへ引き返す、引き返すのが、気のせいだか、いつの間にか、中へはいつて、土間の暗がりともしを点れて来る。……橋がかり、一方が洗面所、突当りが湯殿……ハテナとぎよツとするまで気がついたのは、その点れて来る提灯を、座敷へ振り返らずに、逆に窓から庭の方に乗り出しつつ見ていることであつた。

トタンに消えた。——頭からゾツとして、首筋を硬こわく振り向くと、座敷に、白鷺かと思う女の後ろ姿の頸えりあし脚がスツと白い。

違ちがい棚だなの傍わきに、十畳のその辰巳たつみに据すえた、姿見に向かつた、う

しろ姿である。……湯氣に山茶花の悄れたかと思う、濡れたように、しつとりと身についた藍鼠の縞小紋に、朱鷺色と白のいち松のくつきりした伊達巻で乳の下の縊れるばかり、消えそうな弱腰に、裾模様が軽く靡いて、片膝をやや浮かした、棲を友染がほんのり溢れる。露の垂りそうな円鬚に、桔梗色の手絡が青白い。浅葱の長襦袢の裏が媚かしく搦んだ白い手で、刷毛を優しく使いながら、姿見を少しこごみなりに覗くようにして、化粧をしていた。

境は起つも坐るも知らず息を詰めたのである。

あわれ、着た衣は雪の下なる薄もみじで、膚の雪が、かえつて薄もみじを包んだかと思う、深く脱いだ襟脚を、すらりと引

て掻き合わすと、ぼつとりとして膝近だった懐紙を取つて、くるくると丸げて、掌を拭いて落としたのが、畳へ白粉のこぼれるようであつた。

衣摺れが、さらりとした時、湯どのできいた人膚に紛うとめきが薫つて、少し斜めに居返ると、煙草を含んだ。吸い口が白く、艶々と煙管が黒い。

トーンと、灰吹の音が響いた。

きつと向いて、境を見た瓜核顔は、目ぶちがふつくりと、鼻筋通つて、色の白さは凄いよう。——気の籠もつた優しい眉の両方を、懐紙でひたと隠して、大きな瞳でじつと視て、

「……似合いますか。」

と、莞爾にっこりした歯が黒い。と、莞爾しながら、褻つまを合わせざまにすつくりと立った。顔が鴨居かもいに、すらすらと丈たけが伸びた。

境は胸が飛んで、腰が浮いて、肩が宙へ上がった。ふわりと、その婦おんなの袖そでで抱き上げられたと思つたのは、そうでない、横に口に引き銜くわえられて、畳くわを空に釣り上げられたのである。

山が真黒になつた。いや、庭が白いと、目に遮さへぎつた時は、スツと窓を出たので、手足はいつか、尾鱗おひれになり、我はぴちぴちと跳はねて、婦おんなの姿は廂ひさしを横に、ふわふわと欄間の天人のように見えた。白い森も、白い家も、目の下に、たちまちさつと……空高く、

松本城の天守をすれすれに飛んだように思うと、水の音がして、もんどり打って池の中へ落ちると、同時に炬燵こたつでハツと我に返つ

た。

池におびただしい羽音が聞こえた。

この案山子かかしになど追えるものか。

バスケットの、蔦つたの血を見るにつけても、青い呼吸いきをついてぐつたりした。

廊下へ、しとしとと人の音がする。ハツと息を引いて立つと、料理番が膳ぜんに銚子ちょうしを添えて来た。

「やあ、伊作さん。」

「おお、旦那だんな。」

「昨年のちようど今ごろでございました。」

料理番はひしと、身を寄せ、肩をしめて話し出した。

「今年は今朝から雪になりましたが、そのみぎりは、忘れもしません、前日雪が降りました。積もり方は、もつと多かったのでございませぬ。——二時ごろに、目の覚めさますような御婦人客が、ただお一ひと方かたで、おいでになつたのでございます。——目の覚めるようだと申ししましても派手ではありません。婀娜あだな中に、何となく寂しさのございます、二十六七のお年ごろで、高等な円鬘まるまげでおいででございました。——御容子ごようすのいい、背のすらりとした、見立ての申し分のない、しかし奥様と申すには、どこか媚めなまかし

さが過ぎております。そこは、田舎いなかものでも、大勢お客様をお見かけ申しておりますから、じきにくろうと衆しゅだと存じましたのでございまして、これが柳橋の蓑みのきち吉さんという姐ねえさんだったことが、後に分かりました。宿帳の方はお艶つやさま様でございます。

その御婦人を、旦那——帳場で、このお座敷へ御案内申したの
でございます。

風呂ふろがお好きで……もちろん、お嫌いやな方もたんとございますまいが、あの湯へ二度、お着きになって、すぐと、それに夜分に一度、お入りなすつたのでございます——都合で、新館の建出しは見合せておりますが、温泉ごのみに石たたで置たきました風呂は、自慢でございまして、旧の二階三階のお客様にも、ちと遠うござい

ますけれども、お入りを願つておりましたところが——実はその時々、不思議なことがありますので、このお座敷も同様にしばらく使わずにおきましたのを、旦那のような方に試みていただければ、おのずと変なこともなくなりましょうと、相談をいたしまして、申すもいかがでございしますが、今こんにち日久しぶりわりで、湧かしも使ひもいたしましたような次第わけなのでございします。

ところで、お艶様、その御婦人でございしますが、日のうち一風呂お浴びになりますと、（鎮守様のお宮は、）と聞いて、お参詣まいりなさいました。贄川にえがわ街道かいどうよりの丘の上にございます。——山王様のお社やしろで、むかし人身御供ごごくうがあがつたなどと申し伝えてございます。森々しんしんと、もの寂しいお社で。……村社はほかにもござ

いますが、鎮守と言う、お尋ねにつけて、その儀を帳場で申しま
 すと……道を尋ねて、そこでお一人でのおのぼりなさいました。目
 を少々お煩いのように、雪がきらきらして疼むからと言つて、こ
 んな土地でございます、ほんの出来あいの黒い目金を買わせて、
 掛けて、洋傘を杖のようこもりつえにしてお出掛けで。——これは鎮守様へ
 参詣さんけいは、奈良井宿一統への礼儀挨拶あいさつというお心だつたようで
 ございます。

無事に、まずお帰りなすつて、夕飯の時、お膳ぜんで一口あがりま
 した。——旦那の前でございませうが、板前へと、御丁寧にお心づ
 けを下すつたものでございませうから私てまい……ちよいと御挨拶に出ま
 した時、こういうおたずねでございませう——お社へお供物くもつにきざ

柿がきと楊枝ようじとを買いました、……石段下のその小店のお媪ばあさんの話ですが、山王様の奥が深い森で、その奥に桔梗きぎヶ原ようがという、原の中に、桔梗の池というのがあつて、その池に、お一方ひとり、お美しい奥様がいらつしやると言うことですが、ほんとうですか。——

——まったくでございます、と皆まで承わらないで、私てまいが申したのでございます。

論より証拠、申して、よいか、悪いか存じませんが、現てまいに私てまいが一度見ましたのでございます。」

「……………」

「桔梗ヶ原とは申しますが、それは、秋草は綺麗きれいに咲きます、けれども、桔梗ばかりというのではございません。ただその大池の

水が真桔梗まつきぎようの青い色でございます。桔梗はかえつて、白い花の
 が見事に咲きますのでございまして。……

四年あとになりますまひるが、正午というのに、この峠向うの藪原やぶはら
 宿じゆくから火が出ましたしょうまこく。正午の刻の火事は大きくなると、何国でいずこ
 も申しませんが、全く大焼けでございました。

山王様の丘へ上がりますと、一目に見えます。火の手は、七ななす
 条じにも上がりまして、ぱちぱちぱんと燃える音が手に取る
 ように聞こえます。……あれは山間やまあいの滝か、いや、ぽんぷの水
 の走るのだと申すくらい。この大南風おおみなみの勢いでは、山火事にな
 って、やがて、ここもとまで押し寄せはしまいかと案じますほど
 の激しさで、駈かけつけるものは駈けつけます、騒ぐものは騒ぐ。

私てまいなぞは見物の方で、お社やしろ前は、おなじ夥なかま間で充満いっぱいでございました。

二百十日の荒れ前で、残暑の激しい時でございましたから、ついつい少しずつお社の森の中へ火を見ながら入りましたにつけて、不断は、しつかり行くまじきとしてある処ところではございますが、こ

の火の陽気で、人の気の湧わいている場所から、深いといつても半町とはない。大丈夫と。ところで、私てまい陰気もので、あまり若衆わかしゅづきあいがございますから、誰を誘うでもあるまいと、杉すぎひの

檜きの森々としました中を、それも、思つたほど奥が深くもござい

いませんで、一面の草花。……白い桔梗ききようでへりを取つた百畳敷

ばかりの真青まっさおな池が、と見ますと、その汀みぎわものもの二……三……

…十間とはない処に…お一人、何ともおうつくしい御婦人が、鏡台を置いて、斜めに向かつて、お化粧をなさっていらつしやいました。

お髪ぐしがどうやら、お召ものが何やら、一目見ました、その時の凄すごさ、可恐おそろしさと言つてはございません。ただいま思い出しましても御酒ごしゆが氷になつて胸へ沁しみます。ぞつとします。…それだいてそのお美しさが忘れられません。勿もつたい体ないようでございませけれども、家のないもののお仏壇に、うつしたお姿と存じまして、一日でも、この池の水を視ながめまして、その面影おもかげを思わずにはおられませんのでございます。——さあ、その時は、前後も存ぜず、翼はねの折れた鳥が、ただ空から落ちるような思いで、森を飛

び抜けて、一目散に、高い石段を駆け下りました。私てまいがその顔の色と、怯おびえた様子とはなかつたそうでございましてな。……お社前の火事見物が、一雪崩ひとなだれになつて遁にげ下おりました。森の奥から火を消すばかり冷たい風で、大蛇だいじやがさつと追つたようで、遁にげた私てまいは、野兔のうさぎの飛んで落ちるように見えたということでございまして。

とこの趣を——お艷様、その御婦人に申しますと、——そうしたお方を、どうして、女神おんながみさま様とも、お姫様とも言わないで、奥さまと言うんでしよう。さ、それでございます。私てまいはただ目が暗んでしまいました。前々ぜんぜんより、ふとお見上げ申したものの言うのでは、桔梗の池のお姿は、眉まゆをおとしていらつしやります

るそうで……」

境はゾツとしながら、かえつて炬燵こたつを傍わきへ払つた。

「どなたの奥方とも存ぜずに、いつとなくそう申すのでございまして……旦那。——お艷様に申しますと、じつとお聞きなすつて

——だと、その奥さまのお姿は、ほかにも見た方がありませんか、

とおっしゃいます——ええ、月の山の端は、花の麓路ふもとじ、螢ほたるの影、

時雨しぐれの提灯ちようちん、雪の川べりなど、随分村方でも、ちらりと拝ん

だものはございます。——お艷様はこれをきいて、猪口ちよくを下に置

いて、なぜか、しよんぼりとおうつむきなさいました。——

——とところで旦那……その御婦人が、わざわざ木曾やまがのこの山家

へ一人旅をなされた、用事がでございまする。」

五

「ええ、その時、この、村方で、不思議千万な、色出入り、——
 変なまおとこ姦通事件がございました。

村入りのかりまた雁股と申すところ処に（代官婆）という、庄屋しょうやのお婆ばあさん
 と言え、まだしおらしく聞こえますが、代官婆。……渾名あだなで
 分かりますくらいおそろしくけんべい権柄な、家の系図を鼻に掛けて、
おろ俺が家はむかし代官だぞよ、と二言めには、たつみ上がりになり
 ますので。そのりようけん了簡でございませうから、中年から後家になり
 ながら、手一つで、まず……せがれ俵どのを立派に育てて、これを東京

で学士先生にまで仕立てました。……そこで一頃は東京住居ずまいをしておりましたが、何でも一旦微禄いったんびろくした家を、故郷ふるさとに打つ開ぶけて、村中の面つらを見返すと申して、估券潰れこけんつぶの古家を買ひまして、両三年前ぜんから、その倅の学士先生の嫁御、近頃で申す若夫人と、二人で引き籠もっておりますが。……菜大根、茄子なすびなどは料理に醬油したじが費え、だという儉約で、葱ねぶか、韭にら、大蒜んにく、辣蕪らつきようと申す五蕪うんたぐいの類を、空地中あきちに、植え込んで、塩で弁ずるのでございまして。……もう遠くからふんと、その家が臭においます。大蒜屋敷の代官婆。……

ところが若夫人、嫁御というのが、福島の商家の娘さんで学校をでた方だが、当世に似合わないおとなしい優やさしい、ちと内輪す

ぎますぐらい。もつともこれでなくつては代官婆と二人住居はで
きません。……大蒜ばなれのした方かたで、鋤すきにも、鍬くわにも、連尺に
も、婆どののに追い使われて、いたわしいほどよく辛抱なさいませ。
霜月の半ば過ぎに、不意に東京から大蒜屋敷へお客人がござい
ました。学士先生のお友だちで、この方はどこへも勤めてはいな
さらない、もつとも画師えかきだそうでございませから、きまつた勤め
としてはございませまい。学士先生の方は、東京のある中学校でれ
つきとした校長さんでございませが。――

で、その画師さんが、不意に、大蒜屋敷に飛び込んで参つたの
は、ろくに旅費も持たずに、東京から遁にげ出して来たのだそう。
……と申しますのは――早い話が、細君がありながら、よそに深

い馴染なしみが出来ました。……それがために、首尾も義理も世の中は、さんざんで、思い余つて細君が意見をなすつたのを、何を！と言つて、一つ横よこぞつば頬ほを撲くわしたはいいが、御先祖、お両親ふたおやの位牌いはいにも、くらわされてしかるべきは自分の方で、仏壇のあるわが家には居たたまらないために、その場から門かどを駈かけ出したは出たとして、知ちかづき合あにも友だちにも、女房に意見をされるほどの始末で見れば、行き処どころがなかつたので、一夜ひとよしのぎに、この木曾谷まで遁げ込んだのだそうでございませう、遁げましたなあ。……それに、その細君というのが、はじめ画師えかきさんには恋人で、晴れて夫婦になるのには、この学士先生が大層なお骨折りで、そのおかげで思いが叶かなつたと申したようなわけだそう。……遁げ込み場

所には屈くつきょう 竟きやうなのでございました。

時に、弱りものの画師さんの、その深い馴染というのが、もし、何と……お艶様——手前どもへ一人でお泊まりになったその御婦人なんでもございます。……ちよいと申し上げておきますが、これは画師さんのあとをたずねて、雪を分けておいでになったのではございません。その間がざつと半月ばかりございました。その間に、ただいま申しました、まあとこ姦通騒ぎが起こったのでございます。
」

と料理番は一息した。

「そこで……また代官婆はばに変な癖がございましたな。癖より病で——あるもの知りの方に承りましたのでは、訴訟狂とか申すんだ

そうで、葱ねぶかが枯れたと言つては村役場だ、小児こどもが睨にらんだと言え
 交番だ。……派出所だ裁判だと、何でも上沙汰かみぎたにさえ持ち出せば、
 我に理があると、それ貴客あなた、代官婆だけに思い込んでおりますの
 でございます。

その、大蒜にんにく屋敷の雁股かりまたへ掛かります、この街道かいどう、棒鼻ぼうばな
 の辻つじに、巖穴いわあなのような窪地くぼちに引ッ込んで、石松という獵師が、
 小児がきだくさんで籠こもっております。四十親仁おやじで、これの小僧の時
 は、まだ微禄びろくをしません以前の……その婆のところに下男奉公、女か
 房かあも女中奉公をしたものだそうで。……婆がえろう家来扱いにす
 るのでございますが、石松獵師も、堅い親仁で、はなはだしく御
 主人に奉つておりますので。……

宵よいの雨が雪になりました、その年の初雪が思いのほか、夜半よなかを掛けて積りました。山の、猪しし、兎うさぎが慌あわてます。猟はこういう時だと、夜更よふけに、のそのそと起きて、鉄砲しらべをして、炬端ろばたで茶漬ちやづけを搔かつ食らつて、手製てづくりの猿の皮の毛頭巾けずきんを被かぶつた。筵むしろの戸口へ、白髪しらがを振り乱して、蕎麦切色そばぎりいろふんどしの禪ぜん……いやな奴やつで、とき色の禿はげたのを不断まきます、尻端折しりばしよりで、六十九歳の代官婆だいかんばが、跣足はだしで雪の中に突つ立ちました。(内へ怪ばけものが出た、来てくれせえ。)と顔色がんしよく、手ぶりで喘あえいで言うので。……こんな時鉄砲は強うございますよ、ガチリ、実弾たまをこめました。……旧主人の後室様がお跣足でございますから、石松も素跣足。街道を突つ切つて蕪にら、辣蕪らつきよう、葱ねぶか畑かばたけを、さっさと、化けもの

を見届けるのじや、静かにということ、婆が出て来ました納なんど戸口ぐちから入つて、中土間へ忍んで、指さされるなりに、板戸の節穴のぞから覗きますとな、——何と、六枚折の屏風びょうぶの裡なかに、枕まくらを並べて、と申すのが、寝てはいなかつたそうでございます。若夫人が緋ひの長襦袢ながじゆばんで、搔卷かいまきの襟えりの肩かたからすべにつつた半身で、画師えいしの膝ひざに白い手をかけて俯向けうつむになりました、背中を男おとこが、撫なでさすつていたのだそう。いつもは、もんぺを穿はいて、木綿もめんのちやんちやんこで居る嫁御よめが、その姿で、しかもそのありさままでございませぬ。石松は化けもの以上に驚いたに相違ちがひございませぬ。（おのれ、不義ふぎもの……人畜生にんちくしょう。）と代官婆つちくもが土蜘蛛つちぐものようにのさばり込んで、（やい、……動うごくな、その状さまを一寸すんでも動うごいて崩くずす

と——鉄砲だぞよ、弾丸だぞよ。」と言う。にじり上がりの屏風の端から、鉄砲の銃口をヌツと突き出して、毛の生えた幕のような石松が、目を光らして狙っております。

人相と言ひ、場合と申し、ズドンとやりかねない勢いでございますから、画師さんは面喰らつたに相違ございませんまい。(天罰は立ち廻じや、足四本、手四つ、顔二つのさらしものにしてやるべ。)で、代官婆は、近所の村方四軒というもの、その足でたつき起こして廻つて、石松が鉄砲を向けたままの、そのありさまをさらしました。——夜のあけ方には、派出所の巡查、檀那寺の和尚まで立ち会わせるといふ狂い方でございまして。学士先生おしょうの若夫人と色男の画師さんは、こうなると、緋鹿子の扱帯も藁ひがのこ しごき わら

すべで、彩色さいしきをした海鼠なまこのように、雪にしらけて、ぐったりとなつたのでございます。

男はとにかく、嫁はほんとうに、うしろ手に縛りあげると、細引を持ち出すのを、おまわり 巡査が叱りましたが、叱られるとなお吼り立って、たちまち、裁判所、村役場、派出所も村会も一所にして、かんつう 姦通の告訴をすると、のぼせ上がるので、どこへもやらぬ監禁同様という趣で、ひとまず檀那寺まで引き上げることになりましたが、い 活き証じようこ 拠ただと言ひ張つて、嫁に衣服きものを着せることを肯ききませんので、おまわり 巡査さんが、雪のかかった外がい 套とうを掛けまして、何と、しかし、そろそろと村の女小兒こどもまであとへついて、寺へ参つたのでございますが。」

境はききつつ、ただ幾度も歎息した。

「——遁にがしたのでございませうな。画師さんはその夜のうちに、寺から影をかくしました。これはそうあるべきでございませう。——さて、聞きますれば、——せがれ倅の親友、兄弟同様の客じやから、倅同様に心得る。……半年あまりも留守を守つてさみしく一人で居ることゆえ、嫁女や、そなたも、倅と申うて、つもる話もせいや、と申して、身じまいをさせて、衣きものまで着かえさせ、寝る時は、にこにこ笑いながら、床を並べさせたのだと申すことで。……嫁御はなるほど、わけしりの弟分の膝すかに縋すがつて泣きたいこともありましたらうし、芸妓げいしやでしくじるほどの画師さんでございませう、背中を擦さするぐらいはしかねますまい、……でございませうな。

代官婆の憤り方をお察しなさりと存じます。学士先生は電報で呼ばれました。何と宥なだめても承知をしません。ぜひとも姦通の訴訟を起こせ。いや、恥も外聞もない、代官といえど帯刀じゃ。武士たるものは、不義ものを成せいばい敗するはかえつて名誉じゃ、とこうまで間違つては事面倒で。たつて、裁判沙汰にしないとなら、生きておらぬ。咽喉のどぶえ笛鉄砲じゃ、鎌かま腹ばらじゃ、奈良井川の淵ふちを知らぬか。……桔梗ききようヶ池がいけへ身を沈める……こ、こ、この婆ばあめ、沙汰の限りな、桔梗ヶ池へ沈めますものか、身投げをしようとしたら、池が投げ出しましょう。」

と言つて、料理番は苦笑した。

「また、今時に珍しい、学校でも、倫理、道德、修身の方を御研

究もなされば、お教えもなさいます、学士は至つての御孝心。かねて評判な方で、嫁御をいたわる傍はたの目には、ちと弱すぎると思ふほどなのでございますから、困こづじ果てて、何とも申しわけも面めんんぼく目もなければ、とにかく一度、この土地へ来てもらいたい。万事はその上で。と言う——学士先生から画師えかきさんへのお頼みでございませす。

さて、これは決闘はたしじょう状より可恐おそろしい。……もちろん、村でも不義つらものの面へ、唾つばと石とを、人間の道のためとか申して騒かたぐ方が多い真まん中なかでございませすから。……どの面さげて画師さんが奈良井へ二度面がさらされましよう、旦那だんな。」

「これは何と言われても来られまいなあ。」

「と言つて、学士先生との義理合いでは来ないわけにはまいりません。すまい。ところで、その画師さんは、その時、どこに居たと思し召めします。……いろいろのことから、怪けしからん、横よこ 頬ぞつぽを撲はつたという細君の、袖そでのかげに、申しわけのない親御たちのお位牌いはいから頭しりをかくして、尻しりも足もわなわなと震えていましたので、弱つた方はばでございませぬ。……必ず、連れて参ります——と代官婆はばに、誓つて約束をなさいまして、学士先生は東京へ立たれました。

その上京中。その間のことなのでございませぬ、——柳橋みの蓑のき吉姉ちねえさん……お艶様ちねえが……ここへお泊まりになりましたのは。

……」

六

「——どんな用事の御都合にいたせ、夜中、近所が静まりましてから、お艶様が、おたずねになろうというのが、代官婆の処と承つては、一人ではお出し申されません。ただ道だけ聞けば、このことでもございましたけれども、おともが直接について悪ければ、垣根、裏口にでもひそみまして、内々守つて進じようで……帳場が相談をしまして、その人選に当たりましたのが、この、ふつつかかな私なんでもございました。……」

お支度がよろしくばと、私、これへ……このお座敷へ提灯を持って伺いますと……」

「ああ、二つ巴どもえの紋のだね。」と、つい誘われるように境が言った。

「へい。」

と暗く、含むような、おとがい頤で返事を吸って、

「よく御存じで。」

「二度まで、湯殿に点ついていて、知っていますよ。」

「へい、湯殿に……湯殿に提灯を点つけますようなことはございませんが、——それとも、へーい。」

この様子では、今しがた庭に行く時、この料理番とともに提灯が通ったなどとは言い出せまい。境は話を促した。

「それから。」

「ちと変な気がいたしますが。——ええ、ざっとお支度済みで、二度めの湯上がりには薄化粧をなすつた、めしものの藍あいねずみ鼠ねずみが顔の影に藤色ふじいろになって見えますまで、お色の白さつたらありません、姿見の前で……」

境が思わず振り返つたことは言うまでもない。

「金の吸口くちで、烏しやくどう金きんで張つた煙管きせるで、ちよつと齒を染めなすつたように見えます。懐紙かいしをな、眉まゆにあてて私てまいを、おも長に御覽なすつて、

——似合いますか。——」

「むむ、む。」と言う境の声は、水を頬張ほおばつたように咽喉のどに支つかえた。

「畳のへりが、桔梗きぎょうで白いように見えました。

（ええ、勿体ないほどお似合いで。）と言うのを聞いて、懐紙をおのけになると、眉のあとがいま剃そりた立ての真青まつさおで。……（桔梗ヶ池の奥様とは？）——（お姉きょうだい妹……いや一倍お綺麗きれいで）と罰ばちもあたれ、そう申さずにはおられなかつたのでございます。

ここをお聞きなさいまし。」……

（お艶さん、どうしましょう。）

「雪がちらちら雨まじりで降る中を、破れた蛇目傘じやのめで、見すばらしい半纏はんでんで、意気にやつれた画師さんの細君が、男を寝取った情婦おんなとも言わず、お艶様——本妻が、その体ていでは、情婦いろだって工く

面めんは悪うございます。目を煩わづらつて、しばらく親おやもと許へ、納屋なや同然な二階借りで引き籠こもつて、内職に、娘子供に長なが唄うたなんか、さらつて暮らしていなさるところへ、思い余つて、細君が訪ねたのでございます。」

（お艶さん、私わたしはそう存じます。私わたしが、貴女あなたほどお美しければ、

「こんな女房がついています。何やどの夫おとこが、木曾街道きそかいどうの女なんぞに

。」と姦まおとこ通呼まおとこばわりをするその婆ばあに、そう言つてやるのが一番

早分りがすると思ひます。）（ええ、何よりですともさ。それよりか、なおその上に、「お妾めかけでさえこのくらいだ。」と言つて私わたしを見せてやります方が、上になお奥さんという、奥行があつてようございます。——「奥さんのほかに、私ほどのいろがついてい

ます。田舎いなかで意地ぎたなをするもんですか。「婆ばばあにそう言つてやりましょうよ。そのお嫁さんのためにも。」——

「——あとで、お艶様の、したためもの、かきおきなどに、この様子が見えることに、何ともどうも、つい立ち至つたのでございまして。……これでございますから、何の木曾やまぎの山やま猿ざるなんか。しかし、念のために土地の女の風俗を見ようと、山王様御参詣ごさんけいは、その下心だったかとも存じられません。……ところを、桔梗ヶ池すずこの、凄すこい、美しいお方のことをおききなすつて、これが時々人目にも触れるというので、自然、代官婆の目にもとまっています、自分の容きりよう色しきの見劣ひりがする段ひには、美しきで勝つことはできな

い、という覚悟だったと思われます。——もつとも西洋剃刀かみそりをお持ちだったほどで。——それでいけなければ、世の中に煩い婆うるぼ人だすけに切つちまう——それも、かきおきにございました。

雪道を雁股かりまたまで、棒端ぼうばなをさして、奈良井川の枝流れの、青白いつつみを参りました。氷のような月が皎々こうこうと冴さえながら、山気が霧に凝って包みます。巖石がんせき、がらがらの細谿川ほそたにがわが、寒さに水みず涸れして、さらさらさらさら、……ああ、ちようど、あの音、……洗面所の、あの音でございます。」

「ちよつと、あの水口を留めて来ないか、身体からだの筋々へ沁しみ渡るようだ。」

「御同然でございました……ええ、しかし、どうも。」

「一人じやいけないかね。」

「貴方様あなたさまは？」

「いや、なに、どうしたんだい、それから。」

「岩と岩に、土橋が架かかりまして、向うえんじゆに槐の大きいのが枯れて立ちます。それが危なかく、水で揺れるように月影に見えまして、ジイト、私てまいの持ちました提ちようちん灯とうの蠟燭ろうそくが煮えまして、ぼんやり灯ひを引きます。(暗くなると、巴ともえが一つになつて、人ひと魂まの黒いのが歩ある行くようね。)お艷えん様の言葉に——私てまい、はツとして覗のぞきますと、不注意にも、何にも、お綺麗きれいさに、そわつきませんでしたか、ともしかけが乏しくなつて、かえの蠟燭ろうそくを入れてございませぬ。——おつき申してはおります、月夜だし、足許あしもとに差さしつ

支^かえはございませんようなものの、当館の紋の提灯は、ちよつと土地では幅が利きます。あなたのおためにも思ひまして、道はまだ半町足らず、つい一つ走りで、駈^かけ戻りました。これが間違いでございました。」

声も、言^{ことば}も、しばらく途絶えた。

「裏^{うらどべい}土堀から台所口へ、……まだ入りませんさきに、ドーンと天狗星^{てんぐぼし}の落ちたような音がしました。ドーンと^{こだま}笈を返しました。鉄砲でございました。」

「……………」

「びつくりして土手へ出ますと、川べりに、薄い銀のようでしたお姿が見えませぬ。提灯も何も押^おつ放^ぼり出して、自分で

わツと言つて駈けつけますと、居処が少しずれて、バツタリと土手つ腹の雪を枕に、帯腰が谿川の石に倒れておいででした。

（寒いわ。）と現のように、（ああ、冷たい。）とおつしやると、その唇から糸のように、三条に分かれた血が垂れました。

——何とも、かとも、おいたわしいことに——裾をつつもうといたします、乱れ褌の友染が、色をそのままに岩に凍りついて、霜の秋草に触るようだったのでございます。——人も立ち会い、抱き起こし申す縮緬が、氷でバリバリと音がしまして、古襖から錦絵を剥がすようで、この方が、お身体を裂く思いがしました。胸に溜まった血は暖かく流れましたのに。——

撃ちましたのは石松で。——親仁が、生計の苦しきから、今夜

こそは、どうでも獲えものと、しとぎ餅もちで山の神を祈つて出ました。玉味たまみそ噌なすを塗ぬつて、串くしにさして焼いて持ちます、その握飯にぎいには、魔まが寄ると申します。がりがり橋という、その土橋にかかりますと、お艷えん様の方では人が来るのを、よけようと、水が少ないから、つい川の岩に片足おかけなすつた。桔梗きぎようヶ池がいけの怪あやしい奥おく様さまが、水の上を横に伝うと見て、パツと臥ふしう打ちうちに狙ねらいいをつけた。俺おれは魔まを退治たいぢたのだ、村方むらかたのために。と言いつて、いまもつて狂くるつておりま
す。――

旦だんな那な、旦だんな那な、旦だんな那な、提灯ていとうが、あれへ、あ、あの、湯ゆどのの橋はしか
ら、……あ、あ、ああ、旦だんな那な、向むかううから、私てまいが来きます、私てまいとおな
じ男おとこが参まゐります。や、並ならんで、お艷えん様さまが。」

境も菌の根をくいしめて、

「しつかりしろ、可おそろ恐しくはない、可おそろ恐しくはない。……怨うらまれ
るわけではない。」

電燈の球がたま巴になって、黒くふわりと浮くと、炬こたつ燵の上に提灯
がぼうと掛かった。

「似合いますか。」

座敷は一面の水に見えて、雪の気はいが、白い桔梗みぎわの汀に咲い
たように畳に乱れ敷いた。

青空文庫情報

底本：「現代日本文学館3 幸田露伴・泉鏡花」文藝春秋

1968（昭和43）年10月1日第1刷

底本の親本：「鏡花全集」岩波書店

初出：「苦楽」

1924（大正13）年5月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：真先芳秋

校正：鈴木厚司

2001年6月7日公開

2005年11月24日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

眉かくしの霊

泉鏡花

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>